

大雨に伴う浸水における農作物被害防止技術対策について

令和6年（2024年）3月25日

熊本県農業技術課

農業革新支援センター

< 各部門共通 >

ほ場に浸水した水を早急に排水するため、排水溝等を設置し排水を促す。施設等で自然落水による排水が難しい場合は、排水用ポンプ等により強制的に排水を行う。

< 野菜 >

共通事項

1 圃場の排水対策

圃場内の水は、最優先で圃場外への排水に努める。

自然落水だけでは排水が難しい場合は集水場所を作り、ポンプアップにより強制排水を行う。冠水害は地上部ばかりでなく、地下部も水中に浸る結果として起こる障害であり、野菜の種類によってその抵抗力は異なる。

【作物別での冠水害抵抗力】

5日間の冠水に耐えたもの	サトイモ、ヤマイモ、シソ等
2～3日の冠水に耐えたもの	ラッカセイ、ニラ等
2日の冠水に耐えたもの	ネギ、ラッキョウ、ショウガ等
1日の冠水に耐えたもの	ダイズ、ゴボウ、ナス、セルリー、アスパラガス等
7～8時間以上の冠水で被害の著しいもの	インゲン、ホウレンソウ、スイカ、メロン、カボチャ、タマネギ、キュウリ、キャベツ、トマト、イチゴ等

(H27 農業気象災害に対する農作物技術対策資料から引用)

2 冠水の事後対策

- (1) 泥水等で汚れた作物の洗浄を兼ねて実施する1回目の農薬散布時は、時期、種類、散布量等を慎重に検討する。雨が上がったらできるだけ早く殺菌剤（おもに細菌性病害の予防剤）を適用濃度範囲の低濃度域で散布する。
- (2) 冠水・滞水・流入した場合は、土壌中の肥料分の流失が懸念される。野菜類では、特に窒素・苦土・石灰の欠乏等が危惧されるため、葉面散布やかん注により生育の回復を促進する。
- (3) マルチングした畝間に滞水した場合には、過湿を避けるためマルチを上げて土壌を乾かし、通気性を高める。
- (4) 土砂の流出や決壊により、根が露出したり、畝間が雨で叩かれて土が固く締まった圃場では、根元がグラつかないように中耕や土寄せを行う。

施設栽培

1 イチゴ

病害の発生が懸念されるので、冠水した株は動力噴霧機を利用して速やかに泥を洗い流す。その後、灰色かび病を中心に予防散布を行う。冠水した果実は傷みが発生し、青果としての流通が困難となるため、早めの摘果を行い草勢の回復を優先する。

2 ナス科作物（トマト・ミニトマト・ナス・ピーマン等）

疫病等が発生しやすいので予防散布に努める。収穫中のトマト類は裂果の発生が予想されるので、圃場の排水対策も入念に行う。

3 ウリ科作物(キュウリ等)

生育途中での草勢低下や衰弱がみられる場合には、果実の“若採り”や摘果(花)を行う。併せて、草勢をみながらこまめな追肥を行い生育の回復を図る。

4 アスパラガス

土壌養分の流亡による草勢の低下を生じやすいので、追肥や葉面散布を行い回復に努める。併せて根の活性低下の改善のため、発根剤や酸素供給剤を処理する。

ハウス内の過湿による病害の発生が懸念されるので、茎枯病を中心に予防散布を行う。

5 病害虫対策（共通）

(1) ハウス内の換気と排水に努め、過湿にならないようにするとともに、通風・採光を良くし、発病した茎葉・果実は速やかに除去する。

(2) 病害が多発してからの防除は困難になるので予防防除を行う。

露地栽培

1 土壌流亡で崩れた畝は、早急に補修・整畝を実施する。

2 排水を図り1～2日を経て土壌状態が良くなったら、窒素を主体とした少量の追肥や葉面散布を行い、草勢の回復維持に努める。

3 土をかぶった茎葉は早急に洗浄する。

4 中耕・培土によって土壌の通気性を促進して根の発育・草勢回復を図る。

5 病害が多発してからの防除は困難となるので予防防除を行う。